

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1)：文法の多重性と分散性」

2019 年度第 2 回研究会

日時：2020 年 1 月 11 日 (土) 13:00-18:30

場所：東京外国語大学 AA 研 3 階 マルチメディア会議室 (304 号室)

報告者名 (所属)：

- 1) 高橋康德 (神戸大学；AA 研共同研究員)「通時変化への意識と変化のパターン：上海語の事例より」
- 2) 黒田航 (杏林大学)「言語表現が (文法的かどうかより), それが通用するかどうかをまじめに考えると, 言語学はどうなるか？」

研究会の内容

- 1) 高橋康德「通時変化への意識と変化のパターン：上海語の事例より」

・言語変化は言語構造のあらゆるところで起こるが、話者が気づきやすい変化と気づきにくい変化がある。気づきやすい変化と気づきにくい変化では変化の進み方が違うが、その具体的な違いは明らかにはされてこなかった。この発表では、上海語の声調変化の変化をその具体例に、その違いを明らかにする。気づきやすい変化は新旧形式の共存期間を伴い漸進的に進行する一方、気づきにくい変化は新旧形式の共存が見られず急激に一律に変化が進むようである。

- 2) 黒田航「言語表現が (文法的かどうかより), それが通用するかどうかをまじめに考えると, 言語学はどうなるか？」

・一つの言語、その文法に実体があるか否かを考えるとき、用法基盤的アプローチではその実体性を否定する見方が主張されることがある。しかし、生物種の実体性を受け入れずに種の認定をすることが難しいように、言語 (文法) についても個別言語・文法の実体を受け入れずに特定の言語を認定することはできない。

・ネットでの「誤用」「逸脱用法」は非常に多い。こうした「誤用」「逸脱用法」は文法、文法性を考える上で、そのように捉えるべきか。言語学の「通説」としては、言葉が通じるのは文法規則が発話の解釈方法を決めているからだと考えられているが、実際は、特定のグループ内で慣習として確立された用法は「通じる」。ネットでの「誤用」「逸脱用法」も通用し

ている慣習の一部。その意味で、日本語の自然態の一部であり、それを「日本語文法」の外に置くことは適切ではなく、問題なく流通している「誤用」「逸脱用法」を含めて記述できる言語理論が必要である。